【 復活のトロパリ 第7調 】



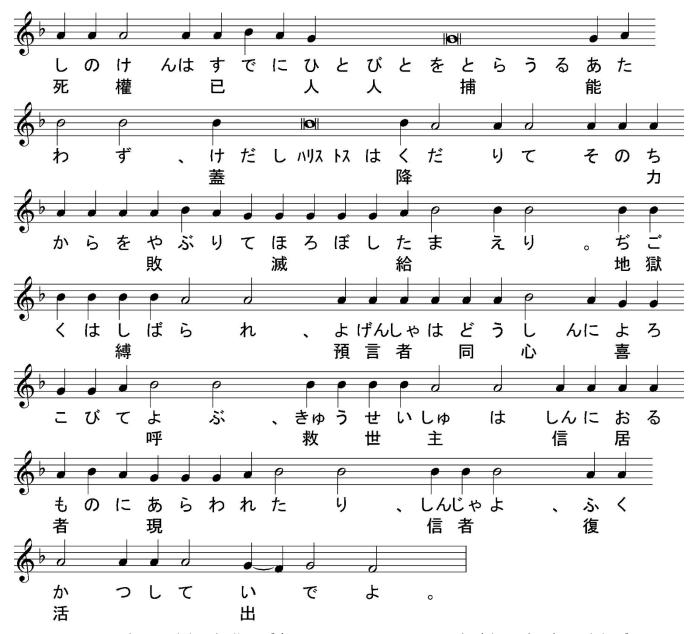
【 十字架擧樂祭のトロパリ 第1調



【 十字架擧榮祭のコンダク 第4調 】 いは う ち ح え ち لح しん 12 き せ い 父 聖 光 榮 神 歸 す 0 あまんじ てじゅう じ か に あげられしハリストス か 3 甘 字 架 舉 神 0 なんぢ が ど うめいの あ らたなるす ま いに ょ 爾 同 名 新 住 處 なんぢ の じれんを なんぢの ち た ま え から 爾 慈憐 賜 爾 力 0 10 ŧ に のてんの う およびく がく って ゎ 以 我 或 天 皇 及 或 つかさどるも のをたのし ま れ し め て か 者 樂 彼 司 きにか た しめた え か れ ら 1 て ま 等 給 彼 敵 勝 ح は なん ぢ のた いあんの す け て ぶ 援 助 平 安 武 爾 ŧ てば た れぬは た を た な IJ か 勝 旗 有 【 復活のコンダク 第7調 】



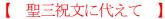
聖体礼儀②(第16主日 十字架擧榮祭) -2



けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いっ よよ司祭) 蓋 我が神よ、爾 は聖なり、我等光 榮を爾 父と子と聖 神に献ず、今も何時も世世

に、







聖体礼儀②(第16主日 十字架擧榮祭) -4



司祭) (黙誦:主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾 は其 國 こうえい ほうざ ぁ つね ぁが ほ いま いっ よよ の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

プロキメン 【 提 綱 主日第7調 及び十字架擧榮祭 第7調 】

っつし き しゅうじん へいあん 司祭) 愼 みて聽くべし、衆 人に平安、

なんぢ しん <mark>誦經</mark>) 爾 の神にも、

えいち **司祭)睿智、**

しゅ そのたみ ちから たま しゅ そのたみ へいあん ふく くだ 誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、









【 使徒經 181端 コリンフ後書6章1~10節 及び125端 コリンフ前書1章18~24節 】

えいち 司祭) 睿智、

せいしと 通經)
聖使徒パヴェルがコリンフ人に達する後書の讀、

司祭) 謹 みて聽くべし、

開經)兄弟よ、我等は同労者として爾等に求む、神の恩寵を徒に受くる勿れ。蓋言えるあり、納るべき時に我爾に聽き、救の日に爾を助けたりと。視よ、今は嘉く納るべき時、視よ、今は救の日なり。我等何事に於ても躓を人に置かず、我が職の誇った。 おいましょく おいましゃ あらわ まなかが、我が職の誇ったの思いました。 おいましゃ あらわ まなわらおお できらいざらん為なり。我等凡の事に於て己を神の役者と顯す、即多くの忍耐に、患難に、窮乏に、困苦に、扑刑に、禁獄に、争亂に、勤労に、儆醒に、禁食に、漁業に、知識に、「位忍に、「仁慈に、聖神に、 偽なき愛に、「眞實の言に、神かない」に、知識に、知識に、「位忍に、「世心しん」に、「自然」

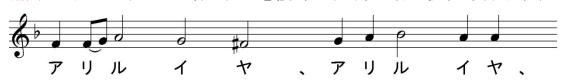
【 アリルイヤ 主日第7調 及び十字架擧榮祭第1調 】

^{なんぢ}へいあん 司祭) 爾に平安、

^{なんぢ}しん **誦經)爾の神にも、**

えいち 司祭) 睿智、

しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた び かな 誦經) アリルイヤ、至 上 者よ、主を讚 榮し、爾 の名に歌うは美なる哉、









なんぢ いにしぇ え かい きおく **誦經) 爾 が 古 より獲たる會 を記 憶 せよ、**





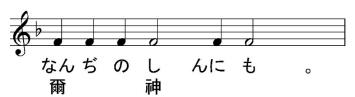
司祭)(黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠をおきる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所な思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

 th なんぢ th たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん 爾 は我が 靈 と 體 との 光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にしいのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いっ よよて生命を 施 す 爾 の神 とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

エヴァンゲリオン 【 福 音 經 マトフェイ福音書 105 端 25 章 14~30 節

及びイォアン福音書60端 19章6~11、13~20、25~28、30~35節 】

えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん 可祭) 睿智、 粛 みて立て聖 福 音 經を聽くべし、衆 人 に平 安、



でん せいふくいんけい よみ司祭)マトフェイ傳の聖福音經の讀、



かざりし虚に穫り、散らさざりし虚に聚むるを知れり、是を以て我懼れて、往きて、爾の の銀を地に蔵せり、視よ、爾の物は爾之を有てり。主彼に答えて曰えり、惡しくして はこれ れる僕よ、爾は我が播かざりし虚。に穫り、散らさざりし虚。に聚むるを知れり、故に教が銀を貿易者に託すべかりしなり、然らば我來りて、本銀と利とを受けしならん。故に彼より一千を取りて、十千を有てる者に與えよ。「禁しれそ有てる者には與えて、 なまり あらしめ、有たざる者よりは其有てる物も奪われん。無益なる僕を外の幽暗に投ぜよ。彼處には哀哭と切齒とあらん。言い畢りて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

(比較用 口語訳) 天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるような ものである。すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、あ る者には一タラントを与えて、旅に出た。五タラントを渡された者は、すぐに行って、それで商売をし て、ほかに五タラントをもうけた。二タラントの者も同様にして、ほかに二タラントをもうけた。しか し、一タラントを渡された者は、行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。だいぶ時がたってから、 これらの僕の主人が帰ってきて、彼らと計算をしはじめた。すると五タラントを渡された者が進み出て、 ほかの五タラントをさし出して言った、『ご主人様、あなたはわたしに五タラントをお預けになりました が、ごらんのとおり、ほかに五タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よく やった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んで くれ』。二タラントの者も進み出て言った、『ご主人様、あなたはわたしに二タラントをお預けになりま したが、ごらんのとおり、ほかに二タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、 よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜 んでくれ』。一タラントを渡された者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所か ら刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行 って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がござい ます』。すると、主人は彼に答えて言った、『悪い怠惰な僕よ、あなたはわたしが、まかない所から刈り、 散らさない所から集めることを知っているのか。それなら、わたしの金を銀行に預けておくべきであっ た。そうしたら、わたしは帰ってきて、利子と一緒にわたしの金を返してもらえたであろうに。さあ、 そのタラントをこの者から取りあげて、十タラントを持っている者にやりなさい。おおよそ、持ってい る人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる であろう。この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、歯がみを したりするであろう』。

しか かれ こたえ な かれ い われ い なんぢ れよりする。然れどもイイスス彼に 答 を爲さざりき。ピラト彼に謂う、我に言わざるか、爾 あにわれ なんぢ じゅうじか てい けん またなんぢ ゆる けん し こた 豈 我に 爾 を 十 字架に釘する權あり、亦 爾 を釋す權あるを知らざるか。イイスス答え い うえ なんぢ あた あら なんぢわれ たい いつ けん こ て曰えり、上より 爾 に 與 えられしに 非 ざれば、 爾 我 に 對 して 一 も 權 あるなし、ピラト此 ことば き そと ひ い しんぱんざ ことば の 言 を聞きて、イイススを外に曳き出だし、審 判座に、リヴォストラトン、エウレイの 言 な ところ ざ そのひ パスハ そなえび とき およそろくじ にガヴァタと名づくる 所 に坐せり。其日は逾越節の 備 日にして、時は 約 六時なり。ピラ じん い み なんぢら おう しか かれらさけ い これ さ これ ト イウデヤ人に謂う、視よ、 爾 等の 王 なり。 然れども 彼 等 號 びて曰えり、 之 を去れ、 之 さ じゅうじか てい かれら い なんぢら おう てい しさいしょちょうこた を去れ、 十 字架に 釘 せよ。 ピラト 彼 等に謂う、 爾 等の 王 を 釘 せんか。 司 祭 諸 長 對 へ い われら ほか おう そのとき かれ じゅうじか てい ため わた て曰えり、我 等にはケサリの 外 に 王 なし。 其 時 ピラト 彼 を 十 字架に 釘 せん 為 に 付 せり。 かれら と ひ ゆ かれおのれ じゅうじか お い されこうべ ところ 彼等イイススを取りて、曳き行けり。彼 己 の 十 字架を負い、出でて、 髑 髏 の 處 、エウ ことば な ところ いた かしこ あ かれ じゅうじか てい またにレイの 言 にゴルゴタと名づくる 所 に至れり。彼處に在りて彼を 十 字架に釘せり、又二 にん かれ とも てい ひとり みぎ ひとり ひだり なか あ ふだ しょ じゅう 人を彼と偕に釘せり、一は右、一は左、イイスス中に在り。ピラト標を書して、十 じか うぇ ぉ しょ いわ じん おぉ 字架の上に置けり、書して云く、イイスス ナゾレイ、イゥデヤ人の王と。 イゥデヤ人の多く ものこ ふだ ょ けだし てい ところ まち ちか そのふだ の者此の標を讀めり、蓋 イイススの釘せられし 處 は城に近かりき、其標エウレイ、グレ ぶん もっ しる はは しまい っま チャ、ロマの文を以て書されたり。イイススの母と、母の姉妹クレオパの妻マリヤと、マリ そのじゅうじ か かたわら た そのははおよ あい ところ もんと ヤマグダリナと、其 十 字架の 旁 に立てり。イイススは 其 母 及び愛する 所 の門徒の ここ た み はは い おんな み なんぢ こ つ もんと い み なんぢ 此に立てるを見て、母に謂う、 婦 よ、視よ、 爾 の子なり。次ぎて 門 徒に謂う、視よ、 爾 はは そのとき この もんとかれ おのれ いえ と そののち いつさい ことすで な の母なり。其時より此の門徒彼を 己 の家に取れり。厥後イイススー 切の事 已に成り し すなわちこうべ ふ しん わた そのひ そなえび か スポタ おおい たるを知りて、 乃 首 を俯して神を付せり。其日は備節日にして、彼の安息日は 大 なる ひ よ じん スボタ しかばね じゅうじか とど ため かれら 日なるに因りて、イゥデヤ人は安息日に 屍 を 十 字架に 留 めざらん 爲 、ピラトに、 彼 等の はぎ ぉ しかばね と ぉぅ こ ゆぇ へいそつきた かれ とも じゅうじか てい 脛 を折りて、 屍 を取り下ろさんことを請えり。故に兵 卒 來りて彼と偕に 十 字架に釘 だいいち もの はぎ お だいに もの またしか きた そのすで しせられし 第 一 の 者 の 脛 を折り、第 二の 者 にも 亦 然 せり。イイススに 來 りて、 其 已 に死し み かれ はぎ お しか ひとり へいそつ ほこ もつ そのわき さ たるを見たれば、彼の脛を折らざりき、然れども一人の兵 卒、戈を以て、其 脅を刺せり、 ^{みづ い}み もの しょう な そのしょう まこと と水と出でたり。見し者は 證 を作せり、其 證 は 眞

(比較用 口語訳) 祭司長たちや下役どもはイエスを見ると、叫んで「十字架につけよ、十字架につけ よ」と言った。ピラトは彼らに言った、「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。 わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」。ユダヤ人たちは彼に答えた、「わたしたちには律法があ ります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」。ピラトがこの言 葉を聞いたとき、ますますおそれ、もう一度官邸にはいってイエスに言った、「あなたは、もともと、 どこからきたのか」。しかし、イエスはなんの答もなさらなかった。そこでピラトは言った、「何も答 えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らない のか」。イエスは答えられた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威も ない」。ピラトはこれらの言葉を聞いて、イエスを外へ引き出して行き、敷石(ヘブル語ではガバタ) という場所で裁判の席についた。その日は過越の準備の日であって、時は昼の十二時ころであった。ピ ラトはユダヤ人らに言った、「見よ、これがあなたがたの王だ」。すると彼らは叫んだ、「殺せ、殺 せ、彼を十字架につけよ」。ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるの か」。祭司長たちは答えた、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」。そこでピラトは、 十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。彼らはイエスを引き取った。イエスはみずか ら十字架を背負って、されこうべ(ヘブル語ではゴルゴダ)という場所に出て行かれた。彼らはそこ で、イエスを十字架につけた。イエスをまん中にして、ほかのふたりの者を両側に、イエスと一緒に十 字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザ レのイエス」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人 がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。さて、イエスの十 字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずん でいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人 よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。それからこの弟子に言われた、「ごらんなさい。これは あなたの母です」。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。そののち、イエス は今や万事が終ったことを知って、首をたれて息をひきとられた。さてユダヤ人たちは、その日が準備 の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、(特にその安息日は大事な日であ ったから)、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした。そこで兵卒らがきて、 イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。しかし、彼らがイエ スのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。しか し、ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。それを見た者があかしを した。そして、そのあかしは真実である。



※ 聖体礼儀③(金口イォアン)へ